

「夢を叶える生き方」

心づくり、人づくり、チームづくり

宮崎県立富島高等学校野球部

監督 濱田 登

目次

一 Introduction

- ① はじめに
- ② 自己紹介
- ③ 野球との出会い
- ④ 迂をもつて直となす
- ⑤ 教師として、指導者として
- ⑥ 野球の素晴らしさ
- ⑦ キャッチボール

二 心づくり

- ① きっかけ
- ② これまでの自分
- ③ 心がけていること
- ④ 口癖が性格をつくる
- ⑤ 魔法の言葉
- ⑥ 予祝
- ⑦ 自分自身を奮い立たせる
- ⑧ プラスの言葉、マイナスの言葉可能性
- ⑨ 心を磨くことの大切さ
- ⑩ 心の置き所
- ⑪ 心ここに在らざれば
- ⑫ 「失敗」と書いて「成長」と読む
- ⑬ 下りのエスカレーター
- ⑭ 限界
- ⑮ 在り方
- ⑯ 人生のテーマ

三 人づくり

- ① 人生には不変の原理が二つある
- ② 侃
- ③ 微差は大差
- ④ 小事が大事を生む
- ⑤ 伸びる選手
- ⑥ 成功の方程式
- ⑦ 何とどう向き合うか
- ⑧ これから求められる力
- ⑨ 人は「変われる」

四 チームづくり

- ① TEAM
- ② 牽引する者に求められる目
- ③ 不易流行
- ④ 貞観政要
- ⑤ 求心性と遠心性
- ⑥ サラリーマン
- ⑦ 叱るコツ
- ⑧ 啐啄同機
- ⑨ キョウイク
- ⑩ ダメにする言葉

五 最後に

- ① 道を究める
- ② Simple is Best
- ③ 明日やろうは「バカ野郎」
- ④ 継続は力なり
- ⑤ 成長

1 Introduction

① はじめに

点と点、相連ねて線と成す

線と線、相並べて面と成す

面と面、相重ねて体(てい)と成す

私が、チーム作りで心がけていることです。点は個を表し、線は個同士の繋がりを表し、体はチームを表すことだと解釈しています。これまでの経験や、私自身が大切にしていること、今現在、考えていることを伝えたいと思います。

② 自己紹介

宮崎県宮崎市田野町の出身です。田野小学校、田野中学校、宮崎商業高校、九州国際大学と勉学に励み、大学卒業後、空港前にある株式会社デンサンに四年間勤務しました。その後、県の教職員として採用され、初任校が都農高校でした。都農高校で九年、宮崎商業高校で十年、富島高校が九年目で現在に至っております。

③ 野球との出会い

私が、小学三年生の時に田野小学校に少年野球チームが発足しました。チーム名を決める際に、いろんな案が出ましたが、私が発案した「わにつかジャイアンツ(現鰐塚ジャイアンツ)」に決まりました。

中学・高校時代は、主将を務めました。おかげでいろんな経験を積むことができました。チームをまとめることの難しさや練習の段取り、気配りや気付く力等いろいろと勉強になりました。

高校最後の夏は、準々決勝で延岡工業高校に逆転負けを喫しまし

た。最終回を迎え、まだ一点差でした。最後の力を振り絞って腹の底から精一杯の声を出してチームを鼓舞しないといけない場面です。しかし、主将だったのに、半ば諦めていました。最後の最後でやりきれなかったことを今でも後悔しています。

大学では、二年生でベンチ入りしましたが、自ら指導者の道を選び、学生コーチとして勉強し、大学四年生の時は、明治神宮大会に出場しベスト4に入ることができました。

④ 迂をもつて直となす

大学を受験する際には、日本体育大学を受験しました。ずっと憧れていた体育の先生になりたいという思いで挑戦しましたが、不合格でした。しかし、諦めたくなくて恩師に相談し、それなら商業科の教師になろうと考え、経済学部のある大学に行くことにしました。

私は高校球児の時に何が何でも甲子園に行きたいと思って、日々の厳しい練習にも耐え頑張ってきました。その時から高校野球の指導者になりたいと考えていました。母校の監督として甲子園に行きたいと夢が膨らんでいきました。

「迂をもつて直となす」という言葉があります。遠回りをしたように思いますが、今振り返ると曲がりくねった道を突き進んだ結果、近道だったように思います。体育の教師になっていたら、野球観も今と違っていたかもしれません。普通科や工業高校、農業高校等に行く可能性もあるので、母校で監督できなかったかもしれない。商業科の教師になったからこそ、母校である宮崎商業高校に帰れたのかもしれない。

⑤ 教師として、指導者として

初任校である都農高校では、部長からスタートし、監督を2年しましたが、その後、同和教育研究員をしました。勤務の形態は他の

教員と一緒に通常通り出勤し授業もします。ただし、担任は持てません。部の顧問も主導ではできないので、サブで携わることになります。

同和教育研究員とは、各地区にある小中高に一人ずつ配置されており、その地区の職員研修で声がかかると講話をしたり、全国各地の研究大会等に参加し研鑽を積み、それを地域に還元するという役割を担っていました。在任中は、人権教育の研究指定を受け研究主任をしました。全国各地を周り差別の現実に接する機会があり、教師として、指導者として、一人の生徒と真摯に向き合うことの大切さに気付かされました。

その後、都農高校を離れ、母校である宮崎商業高校に赴任しました。野球の指導者としては、宮崎商業高校で、九州大会三回、甲子園に夏一回出場しました。現在勤務している富島高校では、九州大会五回、甲子園はセンバツ一回、夏一回出場しました。九州大会、甲子園に出場はしていませんが、それ以上に負けているということだと思います。私の野球人生を振り返ると、勝った時の記憶よりも負けた時の悔しさや記憶の方が鮮明に残っています。その負けた時の悔しさが、日々のモチベーションになっているということは言うまでもありません。

⑥ 野球の素晴らしさ

野球とは、人生そのものだと思っています。ルールは複雑で、ルールブックとして本になるほど、色々と決まり事があります。また、野球用語には、「死」や「盗」、「殺」に「邪」「犠」「暴」といったものがあります。戦時中、英語を使ってはいけな事情等もあり、その当時の名残もあるみたいですが、人生で起こりうるいろんな要素が含まれていると思っっています。もう十年以上前になりますが、こういう一節を読んだことがあります。ちよつと出所は覚えていま

せんが、

野球というスポーツは人生そのものである。

プレーとプレーの「間」に様々な可能性がある。

いろんな「勝負」がある。

チーム対チーム、バッター対キャッチャー、バッター対ピッチャー、キャッチャー対ランナー、監督対監督などがある。

野球は「平等」である。

上手い選手も下手な選手も等しく打順が回り、守備につく。

弱いチームも強いチームも攻守交代する。

他のスポーツはボールそのものが点になるが、

野球は「人間」がホームに帰らないと点にならない。

野球にパス回しなど時間稼ぎはない。

最後まで何があるか分からない。

大逆転で勝つこともあれば土壇場で負けることもある。

だから野球は人生そのものである。

⑦ キャッチボール

誰もが一度は経験したことがあるキャッチボールです。最近、公園や路上で、キャッチボールをしている姿を見なくなりました。危ないからでしょうか？場所がないからでしょうか？それとも時間が無いからでしょうか？野球に携わる者として寂しい気持ちになります。キャッチボールは、コミュニケーションを学ぶための便利なツールなので、いろんな所でキャッチボールを復活させたいと思っっています。佐藤倫朗さんの書かれた「いつもキャッチボールが教えてくれた」には、こんなふうに書かれています。

思い出していただきたいのだが、キャッチボールはコミュニケーションそのものである。父と子の、兄弟の、友人同士のコミュニケーション、言葉のいらぬ不思議な会話である。

人と人とのコミュニケーションだから、キャッチボールには社会性の基本のようなものも当然含まれている。ボールは相手が捕りやすいようにと、胸元に投げ込む。これは「思いやり」であろう。暴投したら「ゴメン！」という。これは「マナー」であろう。相手が暴投しても黙ってボールを拾いに走る。これは「ルール」であろう。いい球がきたら思わず「いい球！」といたくなる。これは相手を「評価」し「尊重」するということだろう。相手の技量や性格を推し量ることができると。これは相対的な「自分認識」だろう。ボールが当たれば当然痛い。「これは「危険認識」ということだろう。

ここに書かれた内容は、まさに言い得て妙だと思います。

私は、物心ついたときから自営業で忙しい父に時間さえあればキャッチボールをねだっていました。肩慣らしが終わったら、すぐにピッチングです。いつも私がピッチャーで父がキャッチャーです。地面にベースを書いてストライク、ボールの判定。フルカウントになると、急に、ツーアウト満塁になって最終回。緊迫の場面をつくって、サインを確認して、モーションに入り投球する。ストライク、ボールの判定で一喜一憂していました。

もうすでに亡くなった父に伝えたい。キャッチボールをしてくれてありがとう。



(画像：著者提供 一部加工)

二 心づくり

① きっかけ

自分自身のこれまでの人生を振り返ると、自分が変わるきっかけがありました。それは人との出会いです。

中学生だった時に体育の先生に憧れ、高校生の時は野球部の監督の先生に憧れ、会社に勤めていた頃は、上司やお客さん、いろんな人たちとの出会いがありました。初任校の都農高校では、人権教育に携わるきっかけをいただきました。宮崎商業高校在任中は、その時の校長先生に「致知」という人間学を学ぶ雑誌を教えてください、いろいろと導いていただきました。

現在は富島高校で巡り会ったコーチとともに、二人三脚で富島高校野球部を作っています。いろんな方たちとの出会いが今の自分を作っていたのだと思います。その時その時で人に恵まれているとつくづく思います。

② これまでの自分

いつも思うことは、今日という一日をなんとなく過ごしたくないと思っています。たった一度きりの人生ですから、何か生きてきた証を残したいと考えています。誰にでも言えることですが、今日という一日を積み重ねた結果が、今の自分だと思えます。これまでの自分を変えられませんが、これからの自分は、今この瞬間から変えることができると思います。その日の目標がその日を支配します。一日をどう生きるか？今、ワクワクしているか？そのように考えることで、一日一日が充実していくのではないかと思います。

③ 心がけていること

言葉の大切さを意識しています。それから、目に見えない応援団

を信じています。それは、自分の言動、行動全てが、自分に返ってくると思っているからです。

また、自分の身に起こったことに偶然は無いと思っています。その事象が実際に起こっているわけですから、必然だったということだと思います。常に想定内とし、何があってもブレないようにしたいと、そのように心がけるようにしています。

④ 口癖が性格をつくる

どこかで、「口癖が性格をつくる」と聞いたことがあります。何かの標語だったのか、本だったのかは定かではありませんが、まさにそうだと思います。頭の中の思考がそのまま口から言葉が発せられていくはずですから、言葉遣いや口癖は、その人の性格をそのまま表すバロメーターになっていると思います。ということは、自分の性格をよくしようと思えば、汚い言葉や蔑む言葉などを使った時、自分自身が気づくことができれば、少しずつ改善できると思います。

⑤ 魔法の言葉

五日市剛さんの「ツキを呼ぶ魔法の言葉」をご存じでしょうか。講演記録を起こした冊子があります。その内容は、五日市さん自身がイスラエルを旅した時に、あるおばあさんとの出会いで、自分の人生が変わったという話です。そのおばあさんに教えてもらったのが魔法の言葉です。「ありがとう」「ツイてる」「感謝します」という三つになります。自分に良くないこと（難）が有るから、「有難う」。何か良いことがあったら「ツイてる！」。こうなったらいいということ（難）を想像しながら「感謝します」と口にします。まだ起こっていない未来のことでも「明日、晴れました！晴れさせて頂き、感謝します」とか、「甲子園に〇〇のおかげで行けました！感謝します！」

とイメージしながら言い切ると本当にそうなってしまいます。思うだけではダメです。声に出すことが大事です。

⑥ 予祝

私が富島高校に赴任したときは、部員は五人しかいませんでした。職員歓迎会で「三年で九州大会、四年で甲子園に出場します！」と高らかに宣言しました。その瞬間、会場では失笑を買いました。確かに部員は五人しかいないので笑われて当然です。私は「そうですよね」と笑って返しましたが、腹の中では「絶対、甲子園に行つてみせる」と誓い、それをモチベーションにしました。

実際、それくらいのスピード感でやらないとチームは強くなりません。いつかそのうちにと思っていたら、目標を達成できないと思っていました。夢に期限を決めるとそれが目標になると言われたことがあります。大きい目標を達成するために、逆算し、小さな目標を定め、一点集中でクリアしていきました。

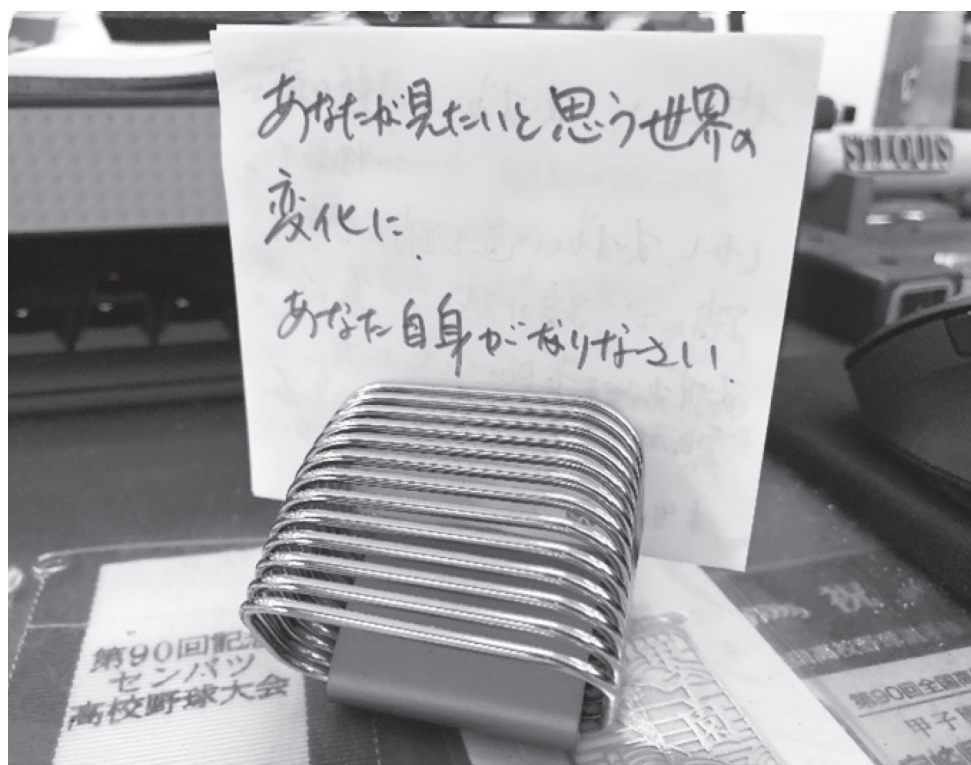
もう一つ大切にすることが予祝です。春、桜の木の下で花見をするのは、日本古来の考え方です。秋の五穀豊穡を願って前祝いをするので、願いを叶えるそうです。これを予祝といいます。実際に、三年で九州大会出場できました。それから四年と宣言しましたが、一年遅れで甲子園出場の夢も果たすことができました。周りからは奇跡などと言われましたが、言葉の力を実感しました。

⑦ 自分自身を奮立たせる

私は富島高校に赴任した際に、ある言葉をメモに書いて、毎日読み聞かせてその日をスタートするようにしています。九年経った今でもです。ちょうど赴任してすぐの最高のタイミングでこの言葉に出会いました。それは、

「あなたが見たいと思う世界の変化に、あなた自身がなりなさい」

というマハトマ・ガンジーの言葉です。私は、一生に一度、甲子園に行ければいいと思っていました。しかし、一度行ってみると、二度目を味わいたいと思いました。私自身は、甲子園を一度経験できたから別にいいのですが、とにかく教え子を連れて行きたい。鍛えた選手たちに甲子園の感動を味わわせたいと思うようになりました。その気持ちがガンジーの言葉とマッチしました。



(画像：著者提供 一部加工)

⑧ プラスの言葉、マイナスの言葉

夢が叶うの「叶」という字は、「口」に「十(プラス)」と書きます。夢を叶えるためにはプラスの言葉を口にしないといけません。また、汚い言葉を口にするのを「毒を吐く」と言います。「吐」という字は、せっかく「十」の言葉を口にして夢を「叶」えようとしても「一(マイナス)」を口にすると「吐」という字になってしまいました。そうなると悪い事に悪いことが重なり負のスパイラルに陥ってしまいます。

⑨ 可能性

誰にでも可能性はあります。しかし、諦めてしまったら可能性はゼロになってしまいます。愚直でもいいから、ずっとやり続けなければならないようになります。今まで、自ら切り拓いてきた選手をたくさん見てきました。だから、選手たちにはコツコツ努力することの大切さを説いています。不可能の英単語は、impossibleです。オーディリー・ヘップバーンが次のような名言を残しています。

Nothing is impossible, the word itself says "I'm possible!"

これを日本語にすると・・・

不可能(impossible)なことはない。不可能という言葉自体「私は可能(I'm possible)」と言っている。

これを初めて見たとき、なるほどと思いました。

⑩ 心を磨くことの大切さ

自分を高めるには毎日欠かさず心を磨かなければならないと思います。一日一日を大切に生きることが悔いを残さない生き方になると思います。時には辛いことや苦しいことはあると思います。そんな試練の時に、自分を磨く絶好の機会として捉えることができます。が大事だと思えます。長く生きれば生きるほど、苦楽や幸不幸があり、そんな日々を磨き砂だと思え、自分を奮い立たせて鼓舞する。それを繰り返すことで生き抜く力が身についていくと思います。

玉、琢かざれば器を成さず

人、学ばざれば道を知らず

(玉も磨かなければ立派な器にはならない。人も学ばなければ立派な道を知ることにはできない)

人間の心というものは、さほどきれいなものではないのかもしれませんが。ある意味自然に似ているのかもしれない。雑草は放っておくと、瞬く間に生い茂っていきます。美しい花を咲かそうと思えば、水を与え、肥料をやり、虫を駆除し、丹精込めて育てなければなりません。人の心も、それと同じだと思います。放っておくと雑草が生えてきます。心の花を咲かせるためには、雑草が小さなうちに丁寧に抜いてあげることです。

⑪ 心の置き所

いかなる状況に陥っても、いかなる事態に出遭っても、常に心をプラスに転じるように心がけることが肝要だと思います。

松下幸之助さんはこう言っています。

「人間は若い時の心がけによって、ずいぶんと差が出るものだ」

稲盛和夫さんはこう言っています。

「仕事を好きになったこと、会社を好きになったこと、そのことによつて今日の私がある」

二人のこの言葉から、心の持ちようが自分の人生に影響を与えるということに気づかされます。やはり日本を代表するようなトップの方々の考えは一致するものです。

世の中、いろんな考えや価値観を持った人がいますが、成功する人とそうでない人の差はどこからくるのでしょうか。私は、心の置き所だと思えます。一つの出来事がありがたい教えだと受け止める人もいれば、全く逆に考える人もいます。艱難にあつた時、豊かな実りにする人もいれば、不平不満の種にしてしまう人もいます。すべては、その人の心の置き所だと思えます。

⑫ 心ここに在らざれば

心構えというのは、どんなに磨いても毎日ゼロになるものです。毎朝歯を磨くように、心構えも毎朝磨き直さなければならぬものです。心とは、その日によつて大きさが変わります。身長が翌日に二十センチ伸びません。体重が翌日に二十キロ減ることもありません。しかし、心は二倍にも三倍にもなったりします。

ところがまえ・・・とは、「心が前」ともいいます。まずは心がここになれば、何も沁みこんでいかないということです。心身を鍛えるには、まずは心が前に来て、その後に行動が伴わなければなりません。

心ここに在らざれば、

視れども見えず、聴けども聞こえず、

食らえども、その味知らず

⑬ 「失敗」と書いて「成長」と読む

失敗をすればするほど、それは自分のデータとして蓄積されると思えます。失敗をすれば、どうして失敗したのか、何がいけなかったのかを考えるようになります。頭を使って、工夫して、ああでもないこうでもないと思恵を振り絞るようになります。その試行錯誤があるから、人は成長するのだと思えます。一番良くないのは、失敗を恐れてチャレンジしなくなることです。そこに成長はありません。その次に良くないのは、失敗を受け入れず真正面から向き合わないことです。そこにも成長はありません。

⑭ 下りのエスカレーター

人生は下りのエスカレーターと一緒です。エスカレーターのスピードは時代のスピードです。立ち止まっていたは段々下に降りていってしまいます。かといって、エスカレーターと同じスピードで歩いていても現状維持のままです。目まぐるしい時代のスピードが速くなっているのです、その速さ以上のスピードで駆け上がらなくてはならないと思っています。

⑮ 限界

限界を作っているのは、実は自分の意思が作っているのです。その意識レベルを上げてあげれば限界値は上がるものなのです。人間は誰しも、苦しみや辛さ、面倒くささからついつい逃げたがるものです。限界を超えないと新しい限界になりません。

⑯ 在り方

自分がよりよい人生を生き抜くために、どのような存在でいたいのか、それが人としての在り方だと思えます。簡単に言えば、自分の軸を作り、ブレない自分をどのように作っていくのか、ということ

とになると思います。

人には二つの種類に分けられると思います。一つは、「自分の人生に誇りを持って生きています」と言える人たちです。もう一つは、「自分らしく生きていない。私らしくないから満足できていない」と言う人たちです。この差はどこから来るのでしょうか。

私は一日一日をどう生きるかで違ってくると思います。もちろん、こうだという答えはないと思います。人によって価値観も違えば環境も違います。それぞれの立場もあれば、性格も違います。自分らしさを追い求めるには、自分の中に「これでいいのか？」という尺度を持って生きることが大事だと思います。そうすれば、徐々に軸というものが自分の中にできくると思います。軸ができてくれば、人を許せたり、人に優しく接することができるようになります。若い頃はイライラしていたのが、歳を取ると丸くなるということも、軸ができるということかもしれません。

⑰ 人生のテーマ

人生は一度きりです。途中でリセットすることはできません。明日、確実に生きていくと保証されている人はこの世に誰一人としていません。事故や事件、災害で亡くなった方々は、五年後の自分、十年後の自分、未来の自分を想像していたはずですが、家族や恋人、夢を追いかけていた人、仲間や友人たちとこれからも楽しい人生を思い描いていた人、いろんな人がいたはずですが。

今の私たちにできることは、今を精一杯生きることだけです。そこで、自分の命題、テーマを持って生きることが大事になってくると思います。

ここで問います。あなたの「人生のテーマ」は何ですか？私の人生のテーマは、「人を育てる」です。「教師として、一監督として、自分の持っている知識や経験を通して「人を育てる」という使命感

を持って日々接するようになっています。少しずつではありますが育ってくれていると思います。



(画像：著者提供 一部加工)

三 人づくり

① 人生には不変の原理が二つある

一つは投げたものしか返ってこないということです。もう一つは、人生は何をキャッチするかということです。同じ話を聞いて、同じ体験をしたとしても、そこから何をキャッチするかは人により千差万別だからです。キャッチするものの中身をどう受け止めるかで、その人の人生を決めるといえるのではないのでしょうか。

投げたものしか返ってこないということは、プラスのことをすればプラスで返ってくるということですが、逆に、マイナスのことをすればマイナスで返ってくるということです。

人の話を一語一句聞き漏らすまいと思いつつながら聴くことができれば、キャッチする中身も変わってくると思います。

② 凧

誰もが経験したことがある凧上げですが、凧は風を受けながら、空高く上がっていきます。こんな詩があります。

「凧」

凧が空高く飛べるのは

誰かが糸を引っ張っているから

でも凧は

その糸さえなければ

もっと自由に

空を飛べると思っている

その糸がなければ

地上に

落ちてしまうのも

知らずに・・・

産経新聞「朝の詩」より

この凧を自分に例えて考えてみてください。「自由に空を飛ぶ」とは、「自由に生きていく」と同意語だと思ふ人もいるかもしれませんが、ここでいう自由とは「自分の思うとおりに」とか「誰からも制約を受けない」ということでしょうか。この詩にもあるように、誰かが糸を引っ張っているから高く飛べるということに気づいてほしいと思います。

学校にはルールがあります。社会に出てもルールがたくさんあります。そのルールがあるおかげでみんなの生活は守られています。邪魔なもの、制約を排除することが自由だと勘違いしている人は、苦しくなるばかりです。「これさえなければ・・・」ではなく、「これがあるからこそ」と受け止めることができるようになれば、邪魔だと思っていたものが邪魔だと思わなくなったり、制約を受けていたものを制約だと思わなくなると思います。「自由」の基本は「人に迷惑をかけない」ことだと思えます。

③ 微差は大差

一日一日は、ほんのちよつとかもしれないが、コツコツと積み重ねていくことができると、やがてそれは大きな差になっていくと思えます。

1.01の法則をご存じですか？今の自分が1だとします。昨日の自分よりほんのちよつと頑張つて0.01の上乗せをします。次の日も次の日もちよつとだけ頑張つていきます。1.01×1.01×1.01と1年間経つと1.01の365乗になり、結果は37.8倍成長したことになります。しかし、ちよつと怠けて0.01サボると0.99になります。次の日も次の日もちよつと怠けて

いきます。0.99×0.99×0.99と1年間経つと0.03の成長になってしまいます。1年経つたのにほぼ成長していないに等しいということになります。37.8は0.03の約1260倍になります。昨日よりも今日、今日よりも明日というように積み重ねは大事です。

④ 小事が大事を生む

これは、イチロー選手がメジャーリーグでシーズン二六二安打の新記録を作ったときに記者の質問に答えた言葉です。記者から、「どうしたら、大記録を作ることができるのですか？」と聞かれ、「記録を目標にしていたわけではありません。毎日、毎日、今やらなければならぬことを積み重ねた結果が二六二本という数字になっただけです」と答えています。まさに小事が大事を生む、だと思えます。それから、結果につながるかどうかも大事な要素だと思います。スポーツライターの田尻賢誉さんのメルマガに掲載された、三田紀房著「ここ一番に強くなれ！」に次のように書かれてあります。

努力という言葉を読むのが許されるのは、

勝者だけだ。

努力そのものに価値はない。

価値とは、

努力の先に掴んだ「結果」だけにある。

これを忘れて努力そのものに価値を見出すと、

大変なことになる。

あなたはこんなセリフを口にしたことはないだろうか？

「こんなに努力したのに評価されないなんておかしい」

「せっかくの努力が認めてもらえなかった。あの人は間違ってる」

いる」

「結果だけを見て判断するなんて理不尽だ。俺だって必死にやっただ」

もし心当たりがあるなら、

今後二度と口にすべきではない。

これらはすべて敗者のセリフである。

⑤ 伸びる選手

まずは、素直かどうかが重要だと思います。聞く姿勢ができていなければ、たとえ耳で聞いたとしても、心のシャッターを降ろしているだけだと思えます。そんな選手に、指導者の考えや思いが伝わらずがありません。

伸びる選手は、「耳」で聞いて、「頭」で訊いて、「心」で聴いています。

⑥ 成功の方程式

稲盛和夫さんの言う「成功の方程式」です。それは、

「人生・仕事の結果 = 考え方 × 熱意 × 能力」

で表すことができます。ここでいう「能力」には頭の良さだけではなく体の丈夫さやスタミナも含んでいます。これにあてはまる数値は0から100です。「熱意」も同様に0から100の数値が当てはまります。「考え方」だけは、マイナス100から100までの数値が当てはまります。たとえ頭が良くて100だとしてもやり抜く熱意がなく0だとすると、結果は0になります。たとえ頭が100で熱意が100でも、考え

方がネガティブでマイナス思考だと結果はマイナスになってしまうということなのです。

⑦ 何とどう向き合うか

これは私の感覚ですが、これまでの十年とこれからの十年は、スピード感が違うと思います。ありとあらゆる溢れ出た情報の中で、何を選択し、どう深めていくかというのは、現代人が忘れがちな部分ではないでしょうか。

例えば、スマホの無い時代は、いろいろな方法で調べ、ああでもない、こうでもないと考えるうちに深まりを増し、奥深く浸透していく感覚がありました。ところが今では、スマホ一つで結論が出てしまいます。そこに深まりはないので、頭に残らなくなってきました。確かに携帯電話は便利です。携帯電話一辺倒になり、頼り切ってしまうと依存症やトラブルに巻き込まれてしまいます。これからは、その使い分けができるようにし、昭和の時代のアナログな部分と、現在のデジタルの部分の活用が大切になってくると思います。

⑧ これから求められる力

世の中、日進月歩で想像を超えるスピードで変化していついています。ほとんどの人がスマホを持ち歩き、必要な情報はすぐに手に入れることができるようになっていきます。そんな中、これから求められる力は、「解決力」と「創造力」です。

どちらにも言えることですが、必要なことは「考える力」を身につけることです。どこに問題があるのか。どこをどうすればいいのか。イメージする力とも言えます。日頃から、順序立ててイメージできることが大事だと思います。

⑨ 人は「変わる」

「CHANGE (変化)」が「CHANCE (機会)」を呼びこんでいきます。「G」を「C」に変える努力が必要なんです。「G」と「C」の違いは、釣である「T」。「T」は「Trouble」の「T」であり「CHANGE (変化)」を恐れて「Trouble (問題)」を避ける「CHANCE (機会)」は訪れないということです。

四 チームづくり

① TEAM

TEAMとは、一説によると「Together Everyone Achievement More」の頭文字を取ってチームというのだそうです。訳すと「みんなで、一緒に、より多くの成果を得ましょう」ということです。

私は選手たちにこんな話をします。「甲子園という扉は大きくて重厚な扉である。しかし、みんなで力を合わせて押せば、開けることのできる扉でもある。この扉をみんなで開けて見せよう。しかし、この中にたった一人でも、無理だとか、ヤラかしたとか、諦めたとか、マイナス要因を作る者がいれば、鍵をすのと同じ行為である。鍵がかかると、どんな力を加えても押し開くことはできない」。チーム一丸というのが、なかなか難しいというのが現実です。私は、だからこそチーム作りは楽しいと考えています。ピンチはチャンスと物事を捉えるようにしています。

監督とはバランス感覚が必要だと思います。「枝葉を見て、木を見て、森を見ず」でもダメだし、「森を見て、木を見ず、枝葉に気づかず」でもダメです。全体を俯瞰しながら細かいところに気づく感覚が求められると思います。

② 牽引する者に求められる目

経営者にせよ、監督にせよ、チームを牽引する者に求められる目とは、まずは「鳥の目」です。鳥というくらいですから高い空から自分のチームを見て、どのポジションにいるのか俯瞰することを意味します。物事の全体を捉え、何が必要なのか、何ができるのか、いつできるのか、総合的に見て判断することを指します。

次に、「虫の目」です。虫ということは小さいということです。細かい数字を読んだり、チェックをしたり、目の前の仕事に集中するということです。細かいところまで徹底してやり遂げることを指します。

三つめは「魚の目」です。魚は水の中にいます。川の流れ潮の流れの中で生きています。流れは時間です。今の時代に合っているのか合っていないのかを見る目です。魚は側線という、深さや流れの速さを感じする感覚機能を備えています。「魚の目」を持つことは、時代の流れの中でチームの進むべき道を舵取ることを指します。

③ 不易流行

今の時代、監督が持ち合わせていけないといけない感覚があります。それは、チームにはチームの、高校野球には高校野球の、野球には野球の、スポーツにはスポーツの、これからも守り続けていかなければいけないことは、守り続けられないといけないという感覚です。

また、新しいことは積極的に取り入れる感覚も絶対に必要だと思えます。一度成功してしまうと固執しがちです。同じ練習をすれば勝てると思ってしまう。選手が変わったり、対戦相手が変わったりすれば当然練習の内容も変わるはずで。

④ 貞観政要

致知出版社から出版されている渡部昇一さんと谷沢永一さんの

「貞観政要」上に立つ者の心得」の本の帯には次のように書かれてあります。「貞観政要」を読まなかった、織田信長や豊臣秀吉の政権は短命に終わり、「貞観政要」を読んだ、徳川家康や北条政子の政権は反映を築いた・・・と。

この本に出会えたことはとてもラッキーでした。トップに立つ者と右腕になる者の関係性が書かれてあります。国のためにならないと判断したなら、遠慮なく苦言を呈する右腕の存在は大事です。また、それを聞き入れるトップの器の大きさも大事だということです。トップを裸の王様にするかしないかは、この関係性が大事だと思います。

⑤ 求心性と遠心性

指導者としてどう在るべきかを常に考え、自分自身を深く深く掘り下げていくことが大事だと思います。この掘り下げて自己を磨くことこそが求心性だと言えます。

その求心性によって身についた心境や、その人が得た感覚を、会社でいえば幹部や部下、チームでいえばスタッフや選手などに伝え、上へ上へと引き上げていくことが遠心性だと言えます。しかし、遠心性を發揮すればするほど抵抗する人や足を引っ張る人が出てくるものです。そこで諦めてしまうとチームの力強さや迫力は失われてしまいます。

監督がやろうとする方向に選手を向かわせることができるのが真の指導者と言えると思います。求心性と遠心性を併せ持った指導者が率いるチームこそが強くなると思います。

⑥ サラリーマン

サラリーマンは会社に行くだけの人のことを言います。ビジネスマンは会社に結果を残しに行く人のことを言います。ただ会社に

行って、定時になればすぐに帰る。給料さえもらえればという安易な考えで、事なかれ主義の人がサラリーマンです。ビジネスマンは、相手のことを考え、やりがいや生きがいを感じながら会社の利益に貢献する人のことを言います。

このことは、選手にも、指導者にも言えることです。指導者は選手たちの人生に関わるわけですから、真摯に向き合い全身全霊で指導できるかどうかだと思います。選手だと、やる気がなくなただけ言われた練習だけをこなし、努力とは無縁の選手です。

⑦ 叱るコツ

叱るコツは三つあります。一つ目はその場でその瞬間に叱ることです。後で注意しておこうでは、最高のタイミングを逃してしまいます。二つ目は、直す方法をきちんと教えることです。三つ目は、その結果、できたのかできなかったのかを視てあげて、はつきりと伝えてあげることだと思います。ダメな指導者は、一つ目だけで終わっていることがほとんどだと思います。それだと、選手は怒られないようにしようとしてしまいます。選手にワクワク感を持たせられない指導者は、自己満足の勝てない指導者と言えると思います。

⑧ 啐啄同機

辞書やネットでは「啐啄同時」の方が多いと思います。しかし、私は「啐啄同機」の方をよく使います。なぜなら、同時だと、その時です。同機だとその瞬間です。差がそんなにあるわけではありませんが、よりタイミングの良い方を使い、同機の方を使っています。

この「啐啄同機」の意味ですが、卵の中の雛鳥が、外に出ようと内側から殻を嘴で突つこうとする瞬間に、それを見ていた親鳥が、外側から殻を突つてあげて殻を破るということです。選手が悩ん

だり壁にぶつかったときに、指導者はいついつい教えたがりません。その状況を見守ってあげて、選手が手を上げた瞬間が最高のタイミングです。その時に、適切なアドバイスを送ることが大事です。

⑨ キョウウイク

「キョウウイク」にはいろいろなあります。普通に使う「教育」があります。それから「共育」があります。選手と一緒に成長するということです。それから「鏡育」があります。指導者の姿を選手が真似するということです。「響育」があります。選手の魂を揺さぶることです。「協育」は、みんなで力を合わせて成長していくということです。「競育」はみんなで競い合いながら成長していくことです。「強育」は強く逞しく成長するということです。それから、こんな「キョウウイク」になってしまわないように気をつけなければなりません。それは「凶育」「恐育」「狂育」「怯育」です。こういう指導になってしまうと、選手をダメにしてしまいます。

もし何かあったら、「今日、行く」も大事なことです。休んだり怪我をしたり、学校や練習に行きたがらない状況になったときには、まずは「今日、行く」ことが大事です。

⑩ ダメにする言葉

負けたとき、失敗したときについて指導者や親が言ってしまうがちな言葉です。それは「精一杯やったんだからいいじゃない」です。この言葉は、選手や子どもが失敗から学ぶ絶好のチャンスを奪っているということです。負けた悔しさは当事者である選手や子どもが一番分かっています。悔しさが自分の心の中で沸々と湧き上がってきて、次の頑張りにつながるエネルギーに変換しようとしているときに、この言葉を言ってしまうと、薄っぺらいものになってしまいます。選手や子どもの方から、大丈夫というニュアンスの言葉が

聞けたときに、悔しさをバネにできる内容の話が聞けたときに労いの言葉をかけてあげると良いと思います。

五 最後に

① 道を究める

何か一つを究めることはなかなか難しいことだと思います。だからこそ、目指しがいいあると思います。道を究めた人たちは、共通して自分を貫いた人たちだと言うことです。日本一の富士山でも、登山道は無数にあります。しかし、頂上は一つです。どの道を選ぶかは登山者が決めることです。決めたからには腹を括り走破することが大事です。絶望の淵に立たされたとしても、そこに見えるほんのわずかな光を見つけ、それに向かってなり振り構わず突き進む精神力が大事だと思います。

② Simple is best

「Simple is Best」というこの言葉は、簡単に使える言葉ではないと思っっています。重みのある深みのある言葉であり、道を究めた人がようやく辿り着けた境地だと思えます。ああでもない、こうでもない、あれもやってこれもやって考えられるすべてのことをやり尽くした人が、ようやく使える言葉だと思えます。経験の浅い人が、実際にやりもしないで、あれも無駄、これも無駄と省いて排除して辿り着いたものとは全然違います。

③ 明日やろうは「バカ野郎」

「明日という日は永遠に來ない」という話があります。明日やろうと思っって、今やらなければ、永遠にやれません。明日を追いかけてもいつも私たちは今日を生きています。

俗説ですが、「翌檜(あすなる)」という木があります。翌檜は檜(ひのき)に似ているけど、檜ではありません。翌檜は明日には檜になるうと頑張っているからというので、翌檜という字になったそうです。明日という日は永遠に來ないから、翌檜は永遠に檜にはなれません。

④ 継続は力なり

先日、Voiceというアプリを利用していたら、こんな話を聞きました。ある経営者がこんな話をしてくれたそうです。

継続は力なり、
更なる継続は宝、
更なる継続は時代、
更なる継続は歴史になる

会社の経営者ですから、いろんな経験を積まれてきたと思います。もちろん否定や批判をするつもりは全くありません。私が考える継続とは、変化のある継続でなければいけないと思います。ただ同じことの繰り返しだけだとマンネリ化し新鮮味に欠けてしまうと思います。常にお客さんの笑顔や、選手たちの喜ぶ顔を想像しながら、工夫をしながら継続していくという感覚が必要だと思っいます。日清食品のカップ麺や、ロングセラーの商品は、事あるごとにバージョンアップしているとテレビで拝見したことがあります。売れている商品には必ず理由があり、更なる高みを目指しながら企業努力をしているはずなんです。

よく選手たちに「シンカ」の話をします。「シンカ」には、「進化」があり、常に前に進む推進力が必要であると思っいます。そして「深化」です。これでもかこれでもかと深く掘り下げていくことも大事

だと思えます。それから「新化」です。先に進み、深く掘り下げると新しい物に生まれ変わることもあると思えます。そうすると、その商品の「真価」が問われると思えます。

⑤ 成長

たゆまぬ努力の結果が、成長につながると思えます。しかし、実際に成長したかどうかは、後から分かることであって、頑張っている人は成長を意識しながらやっていないはずで

大事なことは、自分自身が動くことです。人の苦労話をいくら聞いても成長はしません。壁にぶち当たり、いろいろと言いつ事を考えても、逃げようとしたって、塞ぎ込んで答えは出ません。苦しければ苦しいときほど必死になれば、必ず光が差し込んでくるはずで、活路を見いだすことができるのは自分だけです。

汗水という水をやり、

何クソという肥料をやると、

根性という根が張り、

やる気という木が成長して、

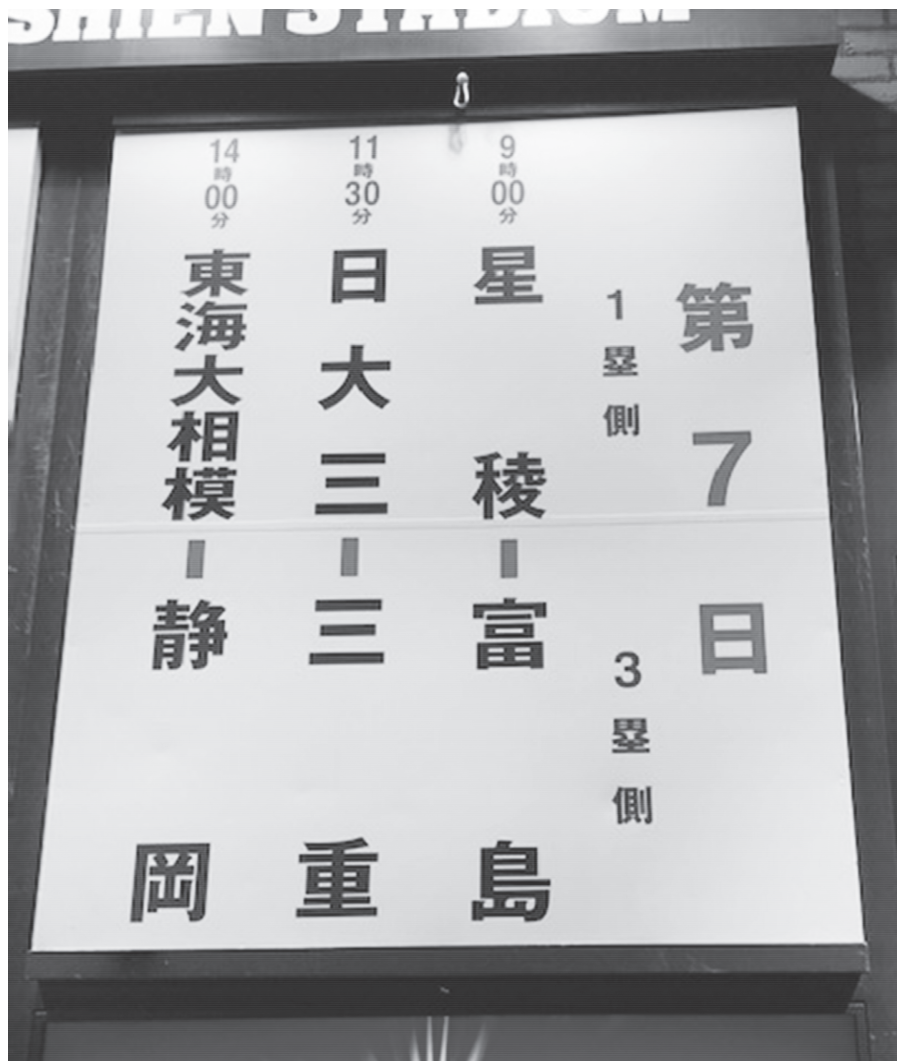
やがて充実という実となる。



(画像：著者提供 一部加工)



(画像：著者提供 一部加工)



(画像：著者提供)